

2021年10月3日～10月9日 各家庭でのディポーション用テキスト

## ■忍耐の訓練（3/5）

モーセはこの民の不平のために、彼らがどんなにみじめな状態に陥っているかを見て、いたく動かされ、心ひそかに神に向かってこう叫ぶことさえした。「私だけでは、この民全体を負うことはできません。私には重すぎます」（11：14）。すると神は恵みを示してモーセに語り、イスラエルの七十人の長老を集めるようにお命じになった。それは「彼らも民の重荷をあなたとともに負い、あなたはただひとりで負うことがないように」するためであった（17節）。また神は、肉が食べたいという民の不平に対して、「主の手は短いのだろうか」と言われた（23節）。

モーセは、この不信仰の民のいわれのない絶えざる不平を忍び通すことができた。それは、「わたし自身がいっしょに行って、あなたを休ませよう」（出エジプト33：14）と約束された「目に見えない方」を、民を越えて見ることができたからである。モーセは、イスラエルの詩人ダビデより何世紀も前の人であり、ダビデの詩を引用したシモン・ペテロよりもさらにずっと以前の人であったが、彼らの次のことばにあらわされたと同じ確信を知っていた。「主の目は義人の上に注がれ、主の耳は彼らの祈りに傾けられる。……もし、あなたがたが善に熱心であるなら、だれがあなたがたに害を加えるでしょう」（1ペテロ3：12、13、詩篇34：15）。他の人々が不平を言うとき、キリストにより頼みなさい！

モーセは、自分の身内の者から非難されても、なお忍び通した（民数12章）。人は俗人から受ける侮辱も、虚弱者の漏らす不平も、相当のところまで無視することができるが、自分の身内から、血肉を分けた者からこうむる打撃や傷を軽視するこ

とはできない。「ミリヤムはアロンといっしょに、モーセ……を非難した」(12：1)。今度神の聖徒に反対したのは、うろたえている不誠実な群衆ではなく、神の聖徒の姉また兄である。群衆は食べ物について不平を漏らし、にらやんににくが食べたいと言っただけであるが、ミリヤムとアロンは、モーセの家庭を非難したのである。このような非難は人の心に深い傷を負わせるものであり、「地上のだれにもまさって非常に謙遜であった」モーセ(3節)のような人でさえ例外ではなかった。家族の者から受ける傷ほど深いものではなく、兄弟から受けるとげほど痛いものはない。

主イエスは次のように言われたとき、信頼する者に裏切られたときの苦しみを知っておられた。「人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせる……。さらに、家族の者がその人の敵となります」(マタイ10：35、36)。彼は、身内の者の手によって、ご自分を必要とする人々から引き離されることがどのようなことであるかを、知っておられた。身内の者が主は「気が狂った」と思ったからである(マルコ3：21)。彼らはイエスの母とともに、イエスを連れ去るために来て、遠くからイエスを呼んだ(31節)。あなたは今までに、神への奉仕に熱心なあまり、知的な均衡を失っていると、たとい遠回しにでも言われたことがあるだろうか。もしそうした経験があるなら、自分の親友たちに発狂していると思われることが、どんなに苦しい体験であるか、いくぶんでも察することができるであろう。主の兄弟たちは主をあざけるように言った。「あなたの弟子たちもあなたがしているわざを見ることができるよう、ここを去ってユダヤに行きなさい。」こう言ったのは、「兄弟たちもイエスを信じていなかった」からである(ヨハネ7：3、5)。

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第三十章「忍耐の訓練」より】  
※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい。